

が、勝山町域の黒田村に泊まっている。

天保九年には、諸国巡見使と御料巡見使が全国へ派遣されたが、これを最後に、その後、幕末にかけて両巡見使とも結果として派遣できなかった。

十三代將軍家定の代は、諸大名の海防や災害による経済的疲弊、巡見使送迎にかかる出費負担を配慮して安政四年（一八五七）まで延期された。続く家茂・慶喜の代も、「諸家の疲弊」を理由に延期、そして停止されたが、これはむしろ幕府財政の疲弊と権力の弱体化によるものというべきである。

「天保の改革」で幕政の**ほころび**にふせを打ったものの、弘化・嘉永期に入ると、列強の外圧や社会批判の高揚、財政破綻によって幕藩体制の崩壊が加速されていた。

六 小倉藩主の廻郡

藩主廻郡の行程と道順 將軍の代替わりが行われると、原則として一年以内に、大名領においても、藩主の代替わりごとに、一年以内に、藩主以下重臣による領内廻郡が行われた。

安政三年（一八五六）八月二十九日、小笠原忠嘉ただひろが小倉藩主に就任するや、藩主忠嘉・家老長野九郎兵衛・用人青木庄七・郡代河野四郎ら一行は、翌四年（一八五七）四月十四日に小倉

表5—33 小倉藩主廻郡の行程 安政4年（1857）

月 日	小 休 地	昼 食	小 休 地	泊 地
4.14	（発 駕）	呼野御茶屋	採 銅 所	香春御茶屋
4.15		上野御茶屋	金 田	香春御茶屋
4.16				添 田
4.17	仙 道	彦山客屋		彦山客屋
4.18		油 須 原		大 村
4.19		節 丸	築 城	椎 田
4.20	大 村	八屋御茶屋		宇 嶋
4.21				
4.22				安 武 橋
4.23	今井浄喜寺			大 行 事
4.24	上 稗 田	新 町		行 事
4.25		（雨 天）		
4.26	苅 田	下 曾 根	湯 川	（帰 城）

（「小倉藩主御廻郡覚書」仮題、「長井手永大庄屋文書」）

城を発駕、一三日間に及ぶ領内巡察の末、四月二十六日に帰城した。表5—33は、藩主廻郡の行程を表にしたものであり、図5—19は、廻郡コースを地図の上に落としたものである。「小倉藩主御廻郡覚書」（仮題、長井手永大庄屋文書、九州大学文化史研究施設所蔵）は、このときの記録である。

四月十四日に小倉城を発駕した一行は、呼野―採銅所と小倉街道を通って香春町の御茶屋に止宿、途中、神宮院・高座石寺を参拝した。十五日は、香春宮を参詣し、上野御茶屋で昼食、

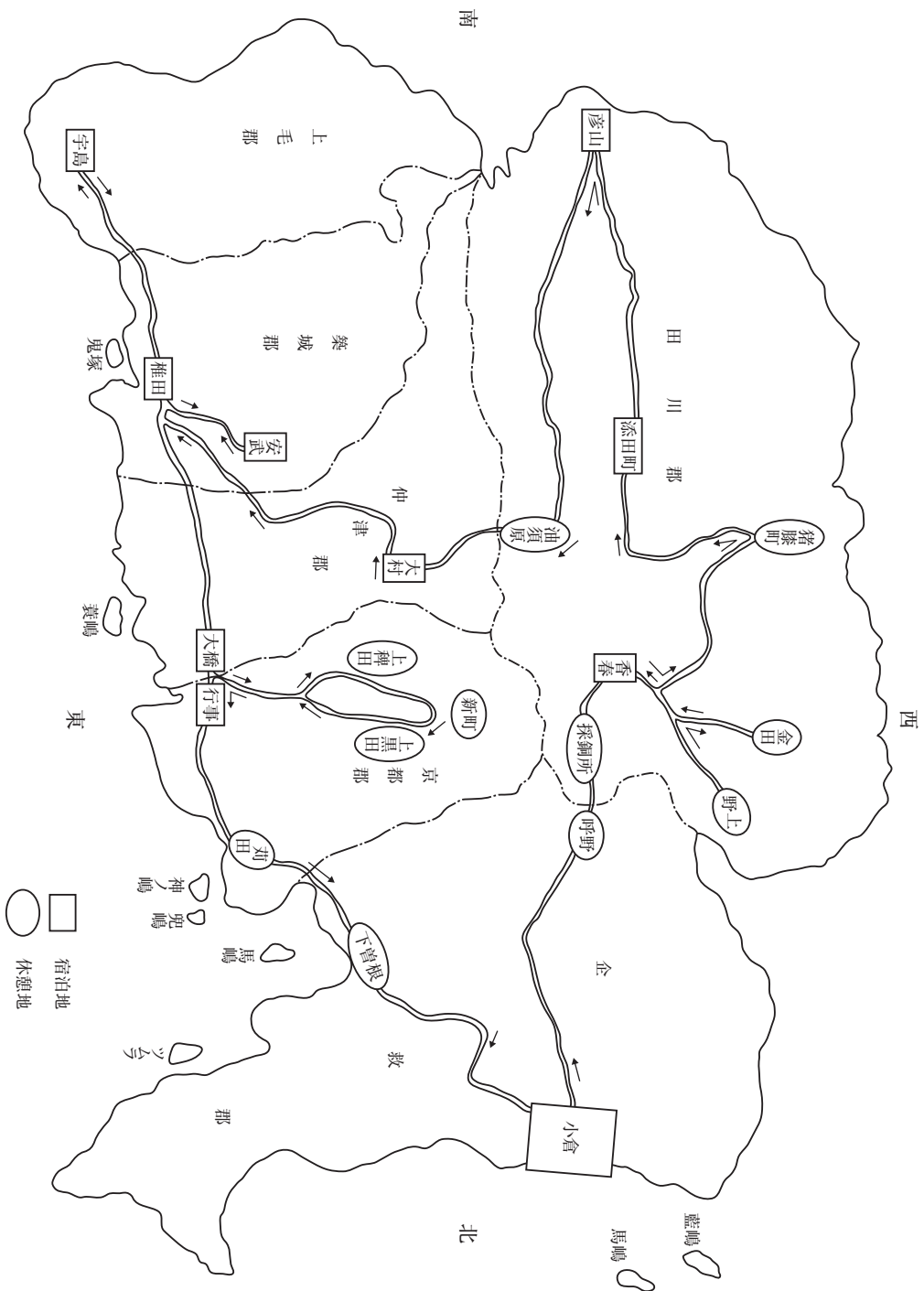


図5—19 小倉藩主の廻郡コース—安政4年(1857)—

皿山を見物し、興国寺を参拝、金田―楠を経て、再び香春町の御茶屋で連泊した。十六日は、後藤寺町―猪膝を経て添田に止宿。十七日は、仙道で小休止、彦山客屋で昼食後、豊前坊社・上宮を参詣、彦山客屋に宿泊した。十八日、彦山を発った一行は、七ツ石―才之原を経て油須原で昼食後、郡境の石坂峠を越え、崎山―山鹿を経て、大村に到着、その日は大村の御陣屋に投宿した。中御本陣を務めた長井手永大庄屋長井又蔵の役宅には、一行のうち、藩主以下二一人が止宿した。

十九日には大村を出立、生立社おいたつしやに参詣し、牛切峠を越えて仲津郡の節丸―綾野―些見を経て、椎田道（筑前秋月往来）に乗り、弓ノ師―築城を経て椎田駅に到着し、投宿した。二十日は、浜宮社・四郎丸社を参詣、八屋御茶屋で昼食後、宝福寺を参拝し、宇島に止宿。二十一日は松丸前で野立、二十二日は安武で宿泊。二十三日は、今井社・大橋正八幡宮を参詣し、大橋に投宿した。

藩主の勝山 そして、「小倉藩主御廻郡覚書」（仮題）の「御廻町域の巡察 郡御休泊附」の、安政四年四月二十四日の項に、

同廿四日

御休泊 大橋

大橋 御發駕

草野正八幡宮

大分社

御小休 上稗田
御昼 新町

寶積寺

立花塚

御腰掛 上黒田

神事場

女躰窟

黒田天神社

二塚正受寺

とあり、二十五日の項に、

同廿五日

御泊 行事

行事 御發駕

雨天二付、等覚寺御参詣なし

とある。つまり、四月二十四日に大橋を発駕した一行は、草野正八幡宮・大分社を参詣し、勝山町域の上稗田で小休止、新町で昼食後、宝積寺・立花塚に立ち寄り、上黒田の神事場で腰掛け、女躰窟を見物し、黒田天神社・二塚正受寺を参拝して、この日は行事に宿泊した。二十五日は雨天のため、行事に連泊、二十六日に荏田で小休止、下曾根で昼食、湯川で小休して小倉城へ帰城した。

この覚書の構成は、藩主廻郡の行程と道順（コース）以外に、

①廻郡する村々の村況（村免高・庄屋名・本高・新地高・物成高・田畑の面積・竈数・人数・牛馬数・産土神・社家・寺院・高札板・名所・古城跡・山・川・池沼・橋・出屋敷・里程・峠・御腰掛・御野立・枝村など）、②手永ごとの竈数と高齢者名とその数、③徳人（苗字・脇差・上下御免の者）、④孝人褒賞、⑤納税褒賞、⑥社人名前、⑦大村よりの諸方里数、⑧御廻郡御順道里数書、⑨長崎行、⑩御留木（伐採を禁止された樹木）、⑪御廻郡御行列、⑫御用意宿、⑬御案内、御付添大庄屋名前、⑭御先払郷筒名前、⑮廻郡世話方、⑯焼失家、⑰酒造人名前、⑱養育子覚、⑲社倉米、⑳御賄方、㉑御家中渡人馬、㉒御菓子出御人数、㉓御下宿割、㉔御廻郡御休泊附、㉕御本陣役割となっており、藩主廻郡の意図・対応が事細かに記録されている。

七 勝山町域を通過した人たち

貝原 益軒

貞享元年（一六八四）一月二十二日、幕府は、「武徳大成記」や「関ヶ原軍記」・「大坂軍記」などを木下順庵に編修させるため、幕臣や諸大名に対して、家譜及び史料の提出を命じた。それで、福岡藩主黒田長重は、その編修調査を藩儒貝原益軒に命じたのである（『日本庶民生活史料集成』第二巻）。

益軒は、大友義統と黒田如水が戦った石垣原合戦の古戦場視察のため、元禄七年（一六九四）四月朔日、豊前・豊後地方へ

の、二〇日間の旅へ出た。このたびの旅は、家族や衣笠半助ら門下生十数名を供連れの、藩命による公式なものであった。『豊国紀行』は、このときの見聞録である。

四月朔日、福岡荒津（現、福岡市荒戸）の自宅を発った益軒は、飯塚―直方―香春を経て、五日には七曲峠を越えて、上野新町の「馬驛」（宿駅）に到達している。

鏡山村を過行ば、其東に、七曲とて高き嶽あり。東西上下の坂、凡一里ばかりあり。其山上は田川、京都両郡の境なり。山上より東北の方、海陸の詠めいとよし。山の東は京都郡なり。

七曲東の麓に上野村有。其西に障子嶽あり。天正十四年、黒田孝高の攻め落し給ひし城跡あり。高橋右近元種が端城也。高山也。

上野新町は七曲嶺を東の方に下だりつくして上野村のなを東に有。馬驛也。香春より一里十七町有。

上野新町の宿駅を通過した益軒は、黒田孝高の謀略で悲惨な最期を遂げた国人領主宇都宮鎮房の居城城井谷を見るため、天生田から西城井谷に入り、光富村を経て、節丸村在住の惣庄屋助右衛門宅に投宿した。翌六日は、山を越えて東城井谷に入り、椎田に出て宿泊。その後、松江―中津高瀬―大貞―如水原―四日市―宇佐八幡宮―豊後高田―木付―日出を経て、黒田如水（孝高）が関ヶ原の戦いの際、大友義統を破った別府市北郊の石垣原の古戦場を実地に見て、十二日は別府の湯宿に泊まった。十三日、別府より船に乗って府内（現、大分市）へ上陸し、